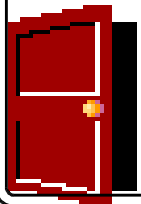


《読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



# 読書活動への扉を開く！

桑村小学校 令和4年10月26日 文責 渡邊

## 読書の秋！さあ、「エンジョイ読書」ですね！

今回も、保護者の皆様方から寄せられた感想を紹介いたします。いつも読書通信に対して感想や意見を寄せていただきたいへん嬉しく思います。

「読書活動への扉を開く」(10月17日を読んで)

とてもおもしろく、難しいテーマですね。例で出ているが「成績が悪いのにあっけらかんとしている子」とは何と比べて悪いとしているのか。「みんな違ってみんないい」とされている時代、成績が悪くともその子の何か輝くものを伸ばせないだろうか。どこまで個性とすればよいのか…。悩みながら子育てしていますが、音楽の授業のような一人一人の課題の振り返りが大切なのだらうと感じました。課題を決めるために、自己理解(メタ認知)が必要で、それには他者理解をしないと自分が見えてこない。読書は他者理解への精度を上げる方法なのですね。(1年生保護者)

「読書活動への扉を開く」(10月20日を読んで)

先日、近所で新聞紙に包んだネギを両手で抱えて下校する上級生の男の子を見かけました。「おかえり。そのネギどうしたの？」ときくと、「学校の畑でとれた」と教えてくれました。ランドセル姿の男の子と青々としたネギの組み合わせにとっても癒やされました。SDGsが叫ばれており、今の子供たちは早い段階で自然に生かされているという意識が芽生えるでしょう。家庭でも自然に対して謙虚に生きるということと一緒に考えたいと思います。(1年生保護者)

とても豊かな自然環境に恵まれた環境の中、桑村小学校の子供たちは伸び伸びと学校生活を楽しんでいます。保護者の感想にあるように、その体験活動から子供たちがどういうことを感じるのかが大切な学びになると思います。そこで働く重要な力が、まさしく「メタ認知能力」です。今、桑村小学校で推進している読書活動から子供たちは様々な経験をしています。その読書から得た経験を実際の体験活動と結び付け、五感を働かせた「振り返る」という学習活動を通して、各々の資質・能力の育成を図っていきたくと考えます。体験活動と読書活動を別なものと捉えるのではなく、それぞれの経験をつなぐことで、子供たちの豊かな五感を育成していきたくと思います。

さあ、読書の秋です！自分のペースで読書を楽しんでみてはいかがでしょうか。私は、出口治明著『人生を面白くする 本物の教養』(幻冬舎 2015)をおもしろく読みました。その著書の中でいちばん楽しく読めた項目は、『考える力』をつけさせる連合王国の教育』の文章です。

ロンドン在住の友人から聞いた話ですが、あるとき12歳の娘さんが宿題の相談に乗ってほしいと持ちかけてきたそうです。友人は仕事が忙しいため、ふだん娘さんとは没交渉になりがちだったので、喜んで娘さんの相談に乗りました。その娘さんは日本人学校ではなく現地の学校に通っていました。出された宿題とは次のようなものだったといえます。

中世に、サセックス地方の裕福な農家へ嫁いだ女性を書いた日記があった。その農

村を仕切っていた地主の執事が書いた記録もあった。それから、19世紀にその時代の農村を調べたオックスフォード大学の教授が書いた「サセックス地方の中世の農家の形態」という論文もあった。この三つを読むにあたって、どういう点に注意すればよいか、というのが宿題の内容だったそうです。(p46)

さあ、皆さんはどう答えますか？とてもおもしろい問題ですね。これには正解がないのではないのでしょうか。提示された情報を鵜呑みにするのではなく、どういう点に気をつけなければいけないのかをじっくり考え、自分の応えを見出すのです。

そう、「答え」（正解）から「応え」（納得解）への発想の転換です。

では、この著書の続きを紹介しますね。友人は、あまりの難しさに内心ひっくり返ってしまい「おまえはどう考えているんだ？」と聞いてみたのです。

いよいよ娘さんの応えです。

嫁いだ女性が書いたことには嘘がないと思う。村で起こったことがあるのままだに書かれているだろう。でも、自動車も電話もない時代だから、自分の目で見える狭い範囲のことにとどまっていると思う。地主の執事が書いた記録は、おそらくより多くの年貢を取りたいという気持ちが働いているだろうから、作物の収穫量などを加減して書いている可能性がある。それを含んで読まなければならないと思う。それからオックスフォード大学の教授の論文は客観的なように見えても、どこかで自分の学説に都合のいいように脚色されている恐れがある。だから頭から信じないようにしたほうがいいと思う。このように答えようかと思っているんだけど、おとうさん、どうかな？(P47)

お父さん、どうかな？と言われても、ねえ…。この著書では、次のように書かれています。「友人は『まあ、それでいいんじゃないか』と答えつつ、『連合王国の教育はすごい！』と舌を巻いたそうです。」

この宿題が目指しているのは、答え探しではなくじっくり考える力をつけることです。本校の子供たちにもじっくり考える力を育てていきたいと思えます。

保護者の皆様方には、先日、「桑村小学校の『強み』と期待する学校像」についてのアンケート調査にご協力いただきました。ありがとうございました。その中に、「自分で考え、チャレンジする学校」であるとか「自然に触れ読書活動を通し、感性が高められる学校」、「失敗を恐れず挑戦し、結果ではなくその過程を認め、自己肯定感が高められる学校」という意見がありました。

自分でじっくり考え、チャレンジする子を育てていくには読書活動の推進に効果が期待されます。さあ、「エンジョイ読書」、読書を楽しみましょう！

----- 切り取り線 -----

「読書活動の扉を開く」（10月26日号）を読んでの感想

（ ）年（ ）